人称理論の可能性

○川津茂生

(国際武道大学体育学部)

キーワード: 先駆的二人称、一人称／三人称対立、意識と脳

The Possibilities of the Theory of Grammatical Person

Shigeo KAWAZU

(International Budo University)

Key words: Anticipatory second person, First person/third person antagonism, Consciousness and brain

人間の実存の危機である、内面での一人称的アクチュアリティと三人称的リアリティの対立（木村、2005）の問題は、構造的に見れば、脳科学における、一人称としての意識と三人称としての脳の対立の問題と同型である。

実存の危機も、脳科学の危機も、一人称と三人称の対立の危機として捉えるとき、一般的な一人称／三人称対立問題の、異なった場面での表面化といえる。

一人称を主観とし、三人称を客観とすれば、もちろんこれは主観と客観との対立の問題ともいえるが、その伝統的な問題を人称の言葉で表現し、一人称／三人称対立問題として眺めるとき、新しい解決方法が見えてくる。

そのような方向性で問題全体を見て行くことは、問題を人称理論の問題として捉えるということだ。

問題は、実存の危機でも、脳科学の危機でも、危機が一人称と三人称の対立として現れてくることにある。

すると、その問題の解決方法は、どのようにしてその対立を和解させて行くのか、という問題へと帰着する。

一つの解決方法は、一人称を強引に貫き、一人称の立場で、三人称の問題まで押し通してしまう方法である。

しばしば、哲学者がこのような方法を選ぶ。哲学者は一人称の立場を貫き、それを崩さない人が多いように見える。

その逆に、三人称の立場を強引に貫き、三人称の立場で、一人称の問題まで押し通してしまう方法もある。

しばしば、科学者がこのような立場を選ぶ。科学者は、三人称の立場を貫き、それを崩さない人が多いように見える。

しかし、これらの立場は、どちらをとっても一種の魔術ではないか、と思われる。

なぜなら、一人称を押し通すと三人称までコントロールできると考えるのは、まるで、心の中で念ずれば石が動くと考ええるかのごとくであり、また、三人称と押し通すと、一人称までコントロールできると考えるのは、物質と意識が直通すると考えることだからだ。

前者は、念力のような、一般的な魔術だし、後者は、その逆という意味で、「逆魔術」とでも呼ぶべきものであろう。

一人称と三人称の対立問題を、そのどちらか一方に偏って解決しようとするれば、どうしても、知的に強引な、無理な要求をしなくてはならない。

だが、実はこの問題は、もっとソフトな解決方法を選ぶべきである。

それは、この対立は人称の対立なのだから、人称によって、対立を媒介してもらい、調停してもらおう、という方法である。

それでは、具体的に、一人称と三人称の対立は、どんな人称によって調停してもらおうのであろうか。

それは、一人称でも三人称でもありでないから、他の人称、すなわち、二人称か、あるいは、無人称によって調停してもらえないのである。

わたしは、結論としては、二人称が、調停を行うと考える。

（理論的には、無人称が、調停を行うとする立場も、あり得る。）

社会的な問題でも、一人称と三人称が対立したら、調停が必要である。その場合、調停者は、必ず二人称の姿勢を取り、対立している両者のそれぞれの意見を対面して聞くと言う姿勢が、必ず必要になる。

一人の人の内面で、実存的に一人称と三人称が対立した場合でも、カウンセラーは、内面的な対立の、両サイドに顔を向け、問題を抱えている個人が、自分自身では出来なくなってしまう、内面的対立の両サイドの間の行き来を柔軟に行い、対立の緊張を緩めて行く努力をしなくてはならない。

このような観点から見れば、対立の調停をするものが二人称であるのは、当然のことのように見えよう。

そこから、類比的に考えれば、脳科学における一人称（意識）と三人称（脳）の対立も、二人称による媒介がなければ解決しないのではないか、という推理もできる。

おそらく、実在の基本カテゴリーは人称なのである。

基本カテゴリーを、一人称（主観）と三人称（客観）に限定すれば、それらの対立を調停するものがなくなってしまう。

媒介者としての二人称は、基本的実在なのである。

しかし、ここで問題なのは、二人称というのは一人称と相関的にのみ現れるのであり、二人称の基礎は、実は一人称ではなか、という疑問であろう。

しかし、「あなた」というのは、「わたし」が、そう呼ぶから、「あなた」なのであろうか。

もし、二人称が、一人称による他者への呼びかけでしかなかったら、二人称の存在は淡く、霧のように消えることもありうる弱い実在かもしれない。

そこで、わたしが提案するのは、「先駆的二人称」という概念である。

先駆的二人称は、潜在的一人称としての相手が、「こちら側」に向かって、「あなた」と呼ぶ前に、先駆的に前もって準備して、「こちら側」から二人称のスタンスをとってしまう。

つまり、二人称は、先駆的二人称によって、「こちら側」に定位されるのである。

この概念によって、二人称は、「向こう側」から「こちら側」へと一般化され、強い実在性を持つようになる。

先駆的二人称は愛の定義なのである。これによって、一般人称理論が可能になって行くであろう。

（先駆的二人称は、川津（2007）が初めて提案した概念である。）

引用文献

川津茂生（2007）先駆的二人称から見た存在、教育研究、49

川津茂生（2008）人称的構造の素描、教育研究、50

川津茂生（2009）一般人称理論へ向けて、教育研究、51

川津茂生（in press）和解の人称

木村敏（2005）関係としての自己 みすず書房